

審査の結果の要旨

氏名 DeWayne Anderson
(ドエイン・アンダーソン)

論文題目 Building for Business, A Typological Study of the Office Building
(オフィスビルの歴史と建築に関する研究)

本論文は、近代現代建築にとって重要な建築類型であるオフィスビルの成立と歴史に着目して、実際的な経営上の問題を含めてその実態を明らかにすることを目的とする。論文の構成は序論と本論、結論、参考文献、図版からなる。

「序論」では、近代初頭において未完成表現に過ぎなかったオフィスビルが、20世紀のはじまりとそれ以後の現代建築において、それ以外の各種の建築類型に劣らぬ重要な役割を果たしたことを指摘し、その役割の形成過程を論文の軸として位置づけたのち、研究対象の時間・空間的な範囲、史料と方法、既往研究について記述した。

以後の本論においては、時代を戦前期と戦後期に分類し、戦後期に関しては戦後の復興から高度経済成長期にいたる期間を15年間と捉え、ひとつの章に割り当て、以後の時代に関しては10年刻みの時代区分によって日本のオフィスビルの発展を、随時アメリカにおけるそれとの比較によりながら記述し、分析してゆく。なお、本論文は英文で執筆されている。

戦前期においてはオフィスビルの機能はわが国においては質的には成立するものの、量的には十分に拡大するまでのポテンシャルを具備してはいなかった。これが大きく拡大してゆくのは戦後経済成長期を経て後のことである。

1945年から1960年に至るオフィスにおいては、財閥解体の影響下にオフィスビルの再編が行われ、いまだに新しいオフィスタイプは出現しなかった、アメリカからの影響下にリーダースダイジェスト等いくつかノビルが生まれる。アメリカにおいてはレヴァーハウス等のビルディング・タイプが成立する。

1960年から1970年にかけてのオフィスビルにおいては、副都心開発などが本格化し、公共性をオフィスビルに付与する方向が模索される。また、メタボリスとたちによる都市像の提案が盛んになされ、その影響は徐々に浸透する。アメリカにおいてはフォード財団ビルが新しいビルディング・タイプの

提出となる。日本においてもメガ・ストラクチュアの提示が行われるようになり、丹下健三による計画イメージ、パレスサイド・ビル、霞が関ビルなどが生まれる。

1970年から1980年にかけてのオフィスビルは、新しい構造体がオフィスの効率を上げるようになり、アメリカにおいてはワールド・トレード・センター、ジョン・ハンコックセンター等が生まれる。構造設計家としてのファズラ・カーンなどの存在が重要性をもつ。日本においてはメタボリズムの実作として中銀カブセルマンションが黒川紀章によって設計される。また、日建設計はIBMビルや五反田のポーラビルにおいて建物の両端にコアを配置したダブルコアのオフィスを完成する。

1980年から1990年にかけてのオフィスビルは、1985年のプラザ合意以後の円高による投機的経済の影響を受け、いわゆるバブル経済の状況を呈する。1986年には東京にアークヒルズが完成し、日本における最初の広域都市再開発の事例となった。海外においては、I.M.ペイによる香港のバンク・オヴ・チャイナがメガ・ストラクチュアの超高層オフィスとして出現する。この後、日本では新宿NSビルにおいてアトリウム空間を取り入れたオフィスビルが生まれ、アメリカにおいてはマンハッタンを中心にポストモダニズムの超高層オフィスビルが林立する時代となる。

1990年から2000年におけるオフィスビルは、複合的な様相を呈してくる。代表的なものとして日建設計による東京芝のNEC本社ビルが上げられよう。ここにはアトリウム型の超高層ビルと、中間階に大きな開口部を設けた構成とが併存して見いだされる。

2000年から2010年にかけてのオフィスビルは新しいアメニティを備える奉公が強まりつつある。クライン・ダイサムなど若手の才能が発揮される例も注目されている。

こうした歴史と傾向の中で、不動産証券化の手法が用いられるようになり、今後のオフィスビルの開発・経営に新展開が見られると思われる。

以上の考察をふまえてわが国におけるオフィスビルの歴史と方向性を展望することが可能になった。このように丁寧に論証を展開する本研究は西洋建築史研究と日本近代建築史研究の融合の成果として極めて有益なものであり、これら分野の発展に資するところが大きい。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。